

博士論文審査要旨

論文提出者： 鴨川 明子（日本学術振興会特別研究員）

論文題目： マレーシアにおける社会変動と青年期女性の進路形成
—ジェンダーとエスニシティを分析視点として—

申請学位： 博士（教育学）

主査： 早稲田大学教育・総合科学学術院 教授

長島 啓記

副査： 早稲田大学教育・総合科学学術院 教授

哲学博士（パリ第一大）

石堂 常世

副査： 京都大学大学院教育学研究科 教授

博士（課程、レディング大学）

杉本 均

副査： 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科 教授

Ph.D.（コーネル大学大学院）

黒田 一雄

1. 本論文の目的

本論文は、途上国では例外的とも言える規模とスピードで進行してきた、マレーシアにおける女子・女性の教育機会の拡大および拡充の過程と構造について、女子生徒の進路形成に焦点を当て、ジェンダーとエスニシティという視点から明らかにすること、それにより途上国における男女間の教育格差の解消という課題に示唆を得ることを目的としている。

マレーシアは、マレー人 6 割、華人 3 割、インド人 1 割とその他の少数民族から構成される複合社会である。マレーシア政府にとって、これらのエスニック集団間の格差を解消することが最優先課題とされてきており、1970 年代初めからマレー人の雇用や教育の機会を優遇するブミプトラ政策がとられてきた。そのマレーシアにおいて、経済成長に伴って女性の在学者数があらゆる教育段階で増加し、男女の割合が拮抗するという状況が生じた。しかし、女性の教育機会の拡大および拡充が他のアジアの途上国に比べて早く進行してきたのは、それを直接的に促進する政策が講じられたからではなく、エスニック集団間格差を是正し国民統合を目指すブミプトラ政策や、経済発展を目標とする人材育成政策が間接的に影響を及ぼしたからである。

また、教育機会の拡大・拡充の恩恵を被ることになったのはマレー人女性に限定されており、華人女性やインド人女性の教育機会は制限されており、格差の問題は残されたままである。華人女性やインド人女性は、エスニシティと女性という 2 つの面でマイノリティ

であり、「二重の差別」を受けてきた。この問題を解明するには、エスニシティとジェンダーに関わる問題を別々にではなく、複合的な観点から取り扱う必要がある。しかし、わが国におけるマレーシア教育研究の多くは、エスニシティのみを主要な分析カテゴリーとして論じてきており、ジェンダーと教育の問題を十分に取り扱ってきたとは言えない。さらに、エスニック集団間の教育の問題がジェンダーと教育の問題にも少なからぬ影響を与えてきたと仮定すると、生徒の進路選択にみられるエスニック集団間、エスニック集団内部の格差についても、複合的な観点から検討する必要がある。エスニック集団間の格差の問題について、政策分析にとどまらず、当事者である生徒の進路形成という側面から実証的に検討することも必要である。

また、1990年代初頭以降、教育開発の援助国や被援助国は初等・中等教育段階の教育開発に力を入れてきている。途上国においても、就学率の上昇を目的とする量的拡大のみならず、教育の質の向上が重要な課題とされるようになってきており、学業達成度の向上や職業機会の獲得だけでなく、教育から職業への移行に関わる進路形成過程についての研究も重要となってきている。しかし、これらの問題についても十分に組み込まれていないのが現状である。

途上国の女性の教育に関する研究において、進路形成過程に関する研究は十分に行われてきたとは言えない。また、女性の中でもイスラームの女性は教育機会を得るのが困難な状況にあり、彼女らの進路形成について考察する際には、性差に基づく役割観等を考慮した上で、進路形成の意識や態度を把握しようとするのが重要となる。マレーシアを事例とするこれまでの研究においては、女性の進路分化の要因は所属するエスニック集団の特性に求められることが多く、女性自身の教育選択や教育ニーズという側面からは十分に検討されてこなかった。

本研究は、マレーシアにおいて女子・女性の教育機会が拡大・拡充してきた要因と背景を歴史的に分析するとともに、進路形成過程におけるマレーシア女性の意識と実態を明らかにしようとする。

2. 本論文の構成

論文全体の構成は、次の通りである。

序章 研究の目的と方法
第1節 問題の所在と研究の目的
第2節 研究の枠組み
第3節 研究の内容と方法、本論文の構成
第1章 先行研究の分析と批判的考察

第1節	比較教育学および教育開発研究における女性・ジェンダー
第2節	マレーシアの教育
第3節	マレーシアの女性・ジェンダーと教育
第4節	女性の高等教育機会の拡大と進路選択
第5節	まとめ
第2章	マレーシアにおける社会変動と女性の教育機会の拡大
第1節	マレーシアの教育制度
第2節	マレーシアにおける女性の教育機会の拡大
第3節	教育改革と女性—教育政策文書を中心に—
第4節	マレーシア計画における人材育成策と女性
第5節	女性関連の法制度・政策
第6節	まとめ
第3章	ペラ州における後期中等学校生徒の進路分化—質問紙調査の量的分析—
第1節	調査対象の選定と仮説の構築—進路指導担当者の予備調査—
第2節	第1次調査の概要
第3節	後期中等学校生徒の進路分化
第4節	後期中等学校生徒の性役割観
第5節	まとめ
第4章	ペラ州における後期中等学校女子生徒の性役割観と進路形成—面接調査の質的分析—
第1節	第2次調査の概要
第2節	マレー人女子生徒の性役割観と進路形成
第3節	華人女子生徒の性役割観と進路形成
第4節	まとめ
第5章	ペラ州における青年期女性の進路形成と自己同定—追跡面接調査の質的分析—
第1節	第3次調査の概要
第2節	青年期女性の進路形成と自己同定の5類型
第3節	まとめ
終章	結論、研究の意義と課題
第1節	結論
第2節	研究の意義
第3節	残された課題と展望

3. 各章の概要

【第1章 先行研究の分析と批判的考察】

第1章では、女性と教育に関する、比較教育学、教育開発研究、マレーシア教育研究、ジェンダー論、教育社会学の進路形成論、女子高等教育論、エスニシティ論、イスラーム教育研究などにおける先行研究が分析される。この分析を通して、女性と教育に関して次のような課題が残されているとする。

第1に、これまで実証研究の対象とされることが少なかった途上国の女性を対象とすることである。比較教育学において、教育と女性を扱う研究は1980年代以降増加してきたが、欧米に比べて、日本やマレーシアではこの分野に関する研究への関心はあまり高くなかった。また、日本の教育社会学においても、欧米の先進諸国が主な対象とされており、それ以外の国や地域を対象とする研究は少なかった。第2に、マレーシアを取り上げ、女子・女性の就学率・在学率が上昇してきた要因や背景について整理し直すことである。マレーシアにおいては、他の途上国に比べて、女子・女性の教育機会が比較的早く拡大・拡充してきた。しかし、どのような施策が講じられたことによりマレーシアの女子・女性の就学率・在学率が上昇してきたのかについては、未だ十分に明らかにされてはいない。第3に、進学阻害要因とみなされがちである性役割観について、女性自身の意識という面から解釈し直すことである。女子教育開発研究や教育社会学において、性役割観は進学疎外要因とみなされてきた。同様に、マレーシアを対象とする教育研究および女性・ジェンダー研究においても、男女の生物学的差異と社会的・文化的なジェンダー差を根拠として、男女の教育機会の相違についてステレオタイプに説明されてきた。第4に、女性の進路形成に着目する際に、ジェンダーと教育の問題だけでなく、エスニシティや社会階層など他の複合的なカテゴリーと組み合わせて分析することである。マレーシアの教育現実を分析する際に、エスニシティは重要な分析カテゴリーであるが、それに加えてジェンダーなどの分析カテゴリーを複合的に用いることも必要である。女性と教育の問題について複合的な観点から分析することは、従来から盛んに論じられてきたエスニック集団間の格差などの問題に、新たな視点を提供することも予測される。第5に、女子教育開発の国際的潮流の中で、男女間の教育格差が改善されてきたマレーシアの事例についての解釈を示すことである。女子教育開発に関する先行研究、政策や実践の大半は、国際機関や援助国が提供する欧米先進国型の概念モデルに依拠してきた。

これら先行研究で残された課題は、次の4つの研究設問としてまとめられる。①いつ、どの政策が、どのように、男女間の教育格差の解消やジェンダー平等の達成に有効に機能してきたのか、②マレーシアの女性の進路形成に影響を及ぼす要因はどのようなものか、③女性自身は自らの進路形成にどのような意識を抱いているか、④他の途上国やアジアのイスラーム諸国の事例の中で、マレーシアの女性と教育の事例をどのように位置づけることができるか、という4つである。

【第2章 マレーシアにおける社会変動と女性の教育機会の拡大】

第2章では、マレーシアにおける女子・女性の教育機会の拡大・拡充の全体像を示すとともに、教育政策や社会経済政策が、各教育段階における女子・女性の就学率・在学率の増加に寄与したか否かについて検討している。その際、主要な教育政策文書等の公表時期により、以下の4つの時期に区分した。

- ・第Ⅰ期（1950年代前半）： バーンズ・レポート（1951年）
- ・第Ⅱ期（1950年代半ば～1960年代）： ラザク・レポート（1956年）、ラーマン・タリブ・レポート（1960年）、第1次マレーシア計画（1966-70年）
- ・第Ⅲ期（1970年代・1980年代）： 第2次マレーシア計画（1971-75年）、第3次マレーシア計画（1976-80年）、マハティール・レポート（1979年）、第4次マレーシア計画（1981-85年）、第5次マレーシア計画（1986-90年）
- ・第Ⅳ期（1990年～）： 第6次マレーシア計画（1991-95年）、高等教育改革（1995年～）、第7次マレーシア計画（1996-2000年）、第8次マレーシア計画（2001-05年）、第9次マレーシア計画（2006-10年）

この時期区分は、植民地教育政策と国民統合による女子教育普及期（第Ⅰ期）、政府による国民統合と女子の教育機会拡大開始期（第Ⅱ期）、人材育成の重点化と女性の雇用の拡大・教育の拡充期（第Ⅲ期）、高度な人材育成のための高等教育改革と女性の雇用および教育の拡充期（第Ⅳ期）と整理される。

第Ⅰ期の植民地教育政策と国民統合による女子教育普及の時期には、イギリス人高等弁務官バーンズにより、マレー人を中心とした国民教育制度を形成する素地となった「バーンズ・レポート」が提出され、そこでは女子・女性に対する教育普及の必要性が積極的に論じられていた。とりわけ、農村の女子の教育の普及のために女子校を設立することなどが課題とされたが、そうした女子教育普及策は当時の農村の状況に必ずしも適合していなかった上に、財政難もあり、十分な成果を上げることはできなかった。

第Ⅱ期は、マレーシア政府が国民統合とエスニック集団間格差是正という課題に取り組む中で、女子の教育機会の拡大が始まった時期である。イギリスから独立した直後に、マレーシアにおける国民教育制度の基本方針・基本理念が盛り込まれた「ラザク・レポート」や「ラーマン・タリブ・レポート」が提出されたが、そこには女子・女性の教育普及策は盛り込まれていなかった。それにもかかわらず、この時期に女子の就学率は上昇し始めていた。

第Ⅲ期は、人材育成の重点化が図られ、女性の雇用の拡大と教育の拡充が進んだ時期である。「マハティール・レポート」は、国民統合の理念を踏襲しながら、人材育成に力点を置く施策を盛り込んでいた。同レポート提出以前に、マレーシア史上最大とも言えるエスニック集団間暴動（1969年）が勃発し、それが契機となりブミプトラ政策が実施されることになった。ブミプトラ政策は、マレー人を農業以外の産業分野で積極的に雇用したり、高等教育機会を供与したりすることにより、エスニック集団間の格差是正を目指す政策で

あるが、都市と農村の格差の解消に寄与し、農村のマレー人女性を労働市場で積極的に活用することとなった。さらに、中等教育の拡大に力が注がれ、中等教育段階修了程度の人材が重点的に育成された結果、教師や看護師などマレーシアにおいて「女性職」とみなされてきた専門職や準専門職の雇用が増加した。このように、1970年代以降、より高い教育段階への女性の進出が始まった。

第Ⅳ期は、高度な人材育成のための高等教育改革が行われ、女性の雇用と教育が拡充した時期である。1990年代の教育改革は、マハティール政権によって実施された。産業構造のドラスティックな変化を受けて実施された改革であり、4つの主要な教育法の改正を伴う大規模な改革であった。90年代には、情報通信産業の開発のため、高度な人材育成が求められ、女性も新たな職種やより高い職階への機会を得ることができるようになった。こうした動向を受けて、高等教育段階における女性の割合は男性の割合を超えるほどになった。

これら各期において女子・女性の教育機会を拡大・拡充させることになった要因は、それを直接的に促進しようとする政策にではなく、国民統合を目指すエスニック集団間格差是正策や、経済発展を目的とする人材育成策に求めることができる。これらの政策においては、すべてのマレーシア女性に対して機会が平等に配分されたのではなく、主としてマレー人女性に対する機会が優先的に供与され、華人女性やインド人女性には十分な機会が提供されなかったこと、政府が女性に期待した役割は労働市場における役割（生産労働）だけでなく、家庭における女性の役割（再生産労働）という「二重の役割」であったことなどの問題が残された。生産労働の場で女性に期待された役割は、家庭における役割を妨げない程度に限定されてしまったのである。

【第3章 ペラ州における後期中等学校生徒の進路分化—質問紙調査の量的分析—】

第3章では、マレーシアの13州の中から、ペラ州を調査対象とし、後期中等学校生徒の進路分化の実態を明らかにしている。ペラ州は人口がおよそ200万人であり、その構成はマレー人が45%、華人が41%、インド人が14%となっている（2000年）。調査対象とする後期中等学校は、予備調査を経て、男女共学のマリム・ナワール中等（普通）学校、華人が生徒の大半を占める男女共学のペイ・ユエン中等（普通）学校、州立の宗教学校で女子校のタッサヤ中等学校の3校とされた。

これら3校の生徒計297人を対象に質問紙調査を実施した。その際、各校の女子生徒について、マリム・ナワール校はマレー人でマレー語を母語とする中間層（下部）・下層と華人で華語を母語とする中間層（下部）・下層、ペイ・ユエン校は華人で華語を母語とする中間層、タッサヤ校はマレー人でマレー語を母語とする中間層（上部）と仮定した。なお、男子のサンプル数に偏りがみられたことから、分析は仮説的にとどめ、マレー人と華人以外の生徒（インド人）も分析の対象から外している。

3校の最終学年（フォーム・ファイブ）の生徒の進路希望は多様であるが、マリム・ナワール校では67.7%、ペイ・ユエン校では72.1%の生徒が進学を希望したのに対し、タッサヤ

校では全員が進学を希望しているなどの結果が得られた。これらの調査結果から、次の 4 点が明らかになった。

第 1 に、先行研究においてすでに指摘されてきている、エスニック集団別の進路分化（「エスニック・トラック」）が存在することが、調査対象校 3 校においても確認することができた。特に、後期中等学校の最終学年（フォーム・ファイブ）修了後に、マレー人生徒は公立大学のマトリキュレーション、華人生徒はフォーム・シックスや私立大学・私立カレッジへの進学を希望するという、エスニック集団別の進路分化が認められた。また、希望する専攻分野もエスニック集団により異なっており、マレー人生徒は人文科学系、華人生徒は自然科学系や経済学・商学などの専攻分野を希望する者が多かった。

第 2 に、エスニック集団別の進路分化だけでなく、性別の進路分化（「ジェンダー・トラック」）も見受けられた。これまで、ジェンダー・トラックの代表的な例として、マレー人女子生徒の中に教員養成カレッジ進学希望者が一定程度いることが指摘されてきたが、本調査では、それを確認した上で、同一のジェンダー内部およびエスニック集団内部における進路の多様性を確認した。たとえば、マレー人女子生徒の中でも、高等教育への進学意欲が高く、希望する専攻分野も多様である女子生徒の割合が多い一方、男女間で進路の違いが少ないと捉えられてきた華人についても、希望する進学先に若干の相違がみられた。さらに、先行研究ではエスニック・トラックとジェンダー・トラックが別々に論じられてきたが、本調査では、エスニック・トラックとジェンダー・トラックが絡み合いながら、複雑な様相を呈していることが明らかになった。

第 3 に、エスニック集団別や性別による進路分化に対して影響を及ぼす要因には、学業成績などの要因が影響を及ぼしていると考えられた。それは、後期中等教育修了後に進学するか就職するかを選択する上でも、また、専攻分野を選択する上でも作用している。さらに、学業成績などの要因だけでなく、エスニック集団別の要因、性役割観に基づく要因、家族の経済的背景に関わる要因なども、進路分化に影響していると考えられる。

第 4 に、マレー人女子生徒の進路形成には、マレー人女性に特徴的な性役割観の及ぼす影響が大きいことが明らかになった。進路形成過程において、女性の教育選択や職業選択について解明するために、性役割観の影響は無視できないということである。

【第 4 章 ペラ州における後期中等学校女子生徒の性役割観と進路形成】

第 4 章では、第 1 次調査（質問紙調査）で確認することができた、後期中等学校生徒の進路選択におけるエスニック集団別の進路分化や性別の進路分化について、それらをもたらす原因や背景等を明らかにするために実施した第 2 次調査（面接調査）の結果が分析されている。面接調査は、後期中等学校の最終学年の生徒 44 人（ペイ・ユエン校 12 人、タッヤ校 22 人、マリム・ナワール校 10 人）を対象とし学校で行い、補足的に 4 人の生徒（マリム・ナワール校）を対象に家庭で行った。

面接調査の結果に基づき、性役割観が進路形成に及ぼす影響は、マレー人女子生徒と華

人女子生徒というエスニック集団別に異なるとともに、同じエスニック集団内部でも学校種別により異なることが明らかになった。

女子生徒の性役割観と進路形成の多様な関係の特徴について、まず、女子生徒の性役割観に対する意見は複雑かつ多様であった。第 1 次調査では女子生徒が固定的性役割観に反対する傾向が強くみられたが、第 2 次調査では、華人女子生徒からは固定的性役割観を否定する意見は多数聞かれたものの、マレー人女子生徒からは固定的性役割観を尊重する意見が多く挙げられた。また、マレー人女子生徒からは、性役割観よりも、経済状況に鑑みた進路選択をしなければならないという意見も少なくなかった。一方、華人女子生徒は、性役割観に対する意識や態度が世代間で大きく異なる点を強調した。

次に、女子生徒の性役割観と高等教育進学との関係はエスニック集団間で異なることが明らかになった。マレー人女子生徒は、賢く子育てし、男性の補助的役割を担うために高等教育に進学することを理想とする。すなわち、女性（母親・妻）として性役割に忠実であろうと高等教育に進学しようとする。これに対して、華人女子生徒は自らの興味・関心や自己実現、自立のために高等教育に進学しようとしており、家庭での性役割を果たすために高等教育に進学するという、性役割観に基づく進路形成には賛成しない。

また、性役割観が職業選択に及ぼす影響にもエスニック集団間で大きな差異が見られた。マレー人女子生徒は教師や看護師という職業を負担が少なく性役割を守りやすい「女性に適する職業」とみなす一方、華人女子生徒は職業選択に性役割はほとんど関係がないと考え、自由な意思により職業を選択しようとし、高等教育修了後の職業的成功も視野に入れて進路形成を行っていた。

さらに、性役割観が高等教育選択や職業選択などの進路形成に及ぼす影響は、エスニック集団間だけでなく、エスニック集団内部でも異なっていた。第 2 次調査で顕著であったのは、学校種別の相違であり、殊に、マリム・ナワール校とタッヤ校との違いが大きかった。タッヤ校のマレー人女子生徒は、比較的学業達成度が高く、公立大学を主とする高等教育進学が選択すべき進路であり、進学により職業機会が拡大し地位や給与がよりよくなる可能性があると考えていた。ただし、タッヤ校のマレー人女子生徒からは、夫が経済的に豊かであれば、自身の職業的成功は望まないという回答が多く挙げられた。それに対して、比較的学業達成度の低いマリム・ナワール校のマレー人女子生徒の社会階層は低く、後期中等学校修了後に、よりよい職業機会を得ることが切迫した問題となるため、経済的に夫を助けることを大事にする意見も少なくなかった。また、家族の経済状況が原因となり高等教育への進学が困難になる生徒も多かった。

以上のように、第 1 次調査では、マレー人女子生徒、華人女子生徒ともに、固定的性役割観に反対する意見が多いという共通点が見出されたのであるが、第 2 次調査では、性役割観が進路形成に及ぼす影響は必ずしも小さくない上に、エスニック集団別にその影響の仕方が異なることが示された。エスニック集団別だけでなく、エスニック集団内部でも、性役割観の進路選択に及ぼす影響は複雑かつ多様であり、それらにおける性役割観の影響

の仕方は、高等教育選択と職業選択において異なっていた。

【第5章 ペラ州における青年期女性の進路形成と自己同定—追跡面接調査の質的分析—】

第5章では、第1次・第2次調査と同一の母集団から選定したサンプルを対象に実施した、第3次追跡面接調査の結果を分析している。調査対象は、後期中等学校修了後に何らかの教育・訓練機関に進学した女性あるいは就職した女性（マレー人女性2人、華人女性5人の計7人）であった。調査は、後期中等学校を修了した後に青年期の女性自身が現実を選択した進路や予想される生涯について、どのように受容・葛藤（自己同定）しているか明らかにすることを目的としていた。主な調査項目は、①後期中等学校最終学年時に女子生徒が描いていた進路展望と実際の進路選択とにギャップがあるか否か、②ギャップがあるとすればそのギャップを生じさせる主要な要因は何であり、どのように作用するか、③実際に選択した進路について女性がどのように受容・葛藤しており、その上でどのような生涯設計を描いているか、という3つである。

7人に対する追跡面接調査から、次のことが明らかになった。

第1に、後期中等学校最終学年時に描いていた進路展望と、中等学校修了後から1年半経った時点で女性が実際に歩んでいた進路には相違がみられた。経済的要因により選択可能な進路の幅が狭められてしまったことにより、希望通りの進路を選べないという女性もいた。特に、マレー人女性に、第2次調査時に抱いていた希望と第3次調査時に歩んでいた進路とに大きなギャップが認められた。そのギャップが大きければ大きいほど、マレー人（ブミプトラ）として機会が十分に与えられているはずであるにもかかわらず、その恵まれた機会を十分に活用できなかったことに葛藤を伴っていた。それに対して、華人女性は、マレー人女性ほど機会が与えられていないという現実に葛藤する者もいれば、後期中等学校最終学年時から華人特有の進路を目指してきたために、第3次調査時点で、理想と現実の隔たりがそれほど小さくなく、現実を受け入れているかにみえる者もいた。

第2に、女性の進路形成に影響を及ぼす原因は多様であり、属するエスニック集団で異なる「エスニシティ要因」、固定的性役割観に対する意識や態度で異なる「ジェンダー要因」、階層間で異なる「経済的要因」が大きな影響を及ぼしていた。これら3つの要因の影響は、マレー人女性はジェンダー要因や経済的要因の影響を受けやすく、華人女性はエスニシティ要因や経済的要因の影響を受けやすいなど、多様であった。

第3に、希望していた進路と実際の進路に対する女性の受容・葛藤のあり方は多様であり、受容している者、葛藤している者、受容しつつも葛藤している者がいた。この受容・葛藤について、エスニシティ、ジェンダー、階層という分析カテゴリーにより、マレー人女性受容型、マレー人女性葛藤型、華人女性受容型、華人女性受容葛藤型、華人女性葛藤型という5つの類型化を試みている。

【終章 結論、研究の意義と課題】

終章では、それまでの論述を踏まえ、女子・女性の教育機会の拡大および拡充の背景と要因を論じる上で、特に重要と考えられる3点を結論として示している。

第1に、マレーシアは1957年の独立から数十年の間に、途上国においては例外的ともいえる規模とスピードで女子・女性の教育機会を拡大・拡充し、男女間の教育格差を解消してきた。これに貢献してきたのは、女子・女性に対する「直接的」差別是正策ではなく、ブミプトラ政策や人材育成政策などの「間接的」差別是正策であった。ブミプトラ政策は、マレー人と華人との社会的・経済的不均衡を克服するために、マレー人に職業機会や教育機会を優先的に配分するというエスニック集団間格差是正策である。ところが、ブミプトラ政策は、華人に比べて経済的劣位にあり「農村の貧困層」であったマレー人に対して様々な機会を提供するにとどまらず、奨学金の供与、マレー語による試験制度の実施、農村部での学校や寮の建設などにより、マレー人、とりわけマレー人女子・女性への教育普及に貢献することとなった。ブミプトラ政策は、農村部の貧困層に対する救済策として機能するだけでなく、男子に比べて教育機会を得ることが困難であったマレー人女子への教育を普及させるという結果をもたらした。先行研究において、ブミプトラ政策はエスニシティの観点から批判されてきたが、ジェンダーの観点からは再評価される面もあったと言える。マレーシアの女性は開発過程で重要な役割を担い、新たな雇用機会とより高い教育機会を得られるようになった。しかし、諸政策の目的は、国民統合を目指すエスニック集団間格差の是正と人材育成であり、すべての女性の教育機会や職業機会を拡大するということにはつながらなかった。マレー人女性は優先的に機会を提供されたが、非マレー人である華人女性等の機会を大きく向上させるまでには至らなかったのである。

第2に、進路形成の意識と実態に関する3次にわたる調査の結果、マレー人女性と華人女性は高等教育に対する強い進学意欲を抱いているという点では共通しているが、性役割観と進路形成の関係については異なる様相が示された。先行研究では、マレーシアの生徒は各々が属するエスニック集団別や性別に典型とされる進路を選択する傾向が強いと論じられてきた。しかし、そのような分析では、エスニック集団間や男女間の差異について説明することはできても、同一のエスニック集団内あるいは同一の性内の進路形成の差異について十分に説明することはできない。3次にわたる調査により、マレー人女性は、社会的成功をねらい、男女間の教育格差を乗り越えるために高等教育を選択するのではなく、「よい妻」「よい母親」を目指して、より知識を得るために高等教育を選択しようとしていること、華人女性は、華人であり女性であるという二重の差別を受けるという状況にあり、性役割観が固定化されることには反発し、教育機会を階層移動のための手段として捉えていることを明らかにした。性役割観を尊重するマレー人であっても、性役割観を否定する華人女性であっても、共通して強い高等教育進学意欲を有していた。それにより、性役割観は必ずしも進学を疎外する要因として作用していないのではないか、という課題が示される。また、本研究が明らかにしたマレーシアの事例は、非イスラームである欧米諸国や日

本のジェンダー論者が克服しようとした固定的（伝統的）性役割観を残したかたちでも教育が尊ばれ、男女関わりなく教育機会を得ることができるという可能性を示している。

第3に、マレーシアのペラ州という1国1地域、2つのエスニック集団の比較から明らかにした女子・女性の教育機会の拡大・拡充の事例は、他の途上国の女子教育普及に対して何らかの示唆を提供する可能性を持つと言える。日本や欧米諸国における非イスラームの女性は、性役割観を重んじるイスラーム女性の教育選択について、「伝統的」と紋切型に、ときにネガティブに評価してきた。国際女子教育開発の文脈において、イスラームの女性と教育の問題を取り扱う際に、その性役割観を尊重することなく、欧米型の男女平等原則に基づく概念モデルの下で、女性に教育機会を提供する政策を実施すると、当該社会に軋轢を生じさせることになる。ジェンダー平等は、決して自明で画一的な目標ではなく、できる限り地域の実情に即して吟味されるべきである。当該国や当該地域内部の多様性にも配慮しながら、女性の教育選択を捉え直し、効果的な女子教育支援策を提言することが今後益々重要になる。

4. 総評

本論文は、途上国では例外的とも言える規模とスピードで進行してきた、マレーシアにおける女子・女性の教育機会の拡大および拡充の過程と構造について、女子生徒の進路形成に焦点を当て、ジェンダーとエスニシティという視点から明らかにしようとした。

これまでのマレーシアにおける中等教育と高等教育の接続に関する研究は、マレーシア政府独特のアファーマティブ・アクションであるブミプトラ政策のゆえに、ほとんどが民族の違いに注目した分析と議論に終始してきたと言ってよい。本論文が、ブミプトラ政策という民族優遇政策の影で、途上国においては例外的とも言えるほどの女性の高等教育進出が進んでいたことに注目したことは高く評価すべき点である。

また、マレーシアにおける女子・女性の教育機会の拡大および拡充の背景・要因を探るために、研究手法として、文献研究と量的・質的調査研究とを組み合わせたという点も評価される。わが国における諸外国の教育に関する研究は、文献研究か量的・質的調査研究かのどちらかに偏ったものが多いのが現状である。そのような中で、政策文書を中心とする文献資料を歴史的にたどり、分析することによって、女子・女性の教育機会の拡大・拡充の背景・要因を明らかにしようとする一方、2年以上をかけ、予備調査と3次にわたる質問紙調査・面接調査を重ねたことは、問題の解明に向けた研究手法として高く評価される。また、マレーシアの教育に関する調査研究は民族問題に関わるセンシティブなものであり、調査研究に対する制約がきわめて大きいというのが実情である。そのような中で、マレーシア政府の許可を得て行われた本研究は、マレーシアをフィールドとして学術的な分析に耐える実証性を持つ数少ない研究の一つであると言える。

さらに、質問紙調査と面接調査により、マレーシアの後期中等学校女子生徒の進学動向

やその背景について、詳細な知見をもたらしたことも評価される。そこで示された性役割観と高等教育への進路選択に関しての分析は、エスニック集団別の違いを明確に把握するという点において優れた考察がみられる。すなわち、マレー人女子生徒は、「よい妻」や「よい母親」になるためという性役割を重視した上で、その役割を担うために高等教育を重視するのに対して、華人女子生徒は、性役割の重要性を認めず、男子と同等の自由な自己実現のために高等教育を利用しようとする傾向が強いことが明らかになった。すなわち、同じ高等教育への進学意欲であっても、マレー人女子生徒はそれを性役割をよりよく遂行するためと考えるのに対して、華人女子生徒は性役割を否定した上で、現実の性差を克服するための手段と考えているという、まったく異なるベクトルを見出している。

最後に、むずかしい課題ではあるが、性役割観を重んじるマレー人女性も含めて女性の教育機会の拡大・拡充が進んできたマレーシアの事例から、他の途上国における女子教育普及に対する示唆を得ようとしていることも、評価したい。

本論文は、このように優れた点が認められる一方、若干の課題も残された。一つは、女子生徒の社会階層による分析の試みについてである。途上国における調査研究ではやむを得ない面があるが、両親の教育歴やコンピューターや携帯電話の所持率などから生徒の社会階層を推定しており、十分な分析がなされているとは言えない。次に、サンプル数の関係から、後期中等教育学校の男子生徒と女子生徒の比較が十分に行われなかったことも課題である。また、ペラ州の3つの学校を調査対象としているが、ペラ州以外の州や地域の状況についてはどうなのであろうか。さらに、マレー人女子生徒と華人女子生徒の受容と葛藤に関して類型化を試みている点は評価できるが、サンプル数からして、類型化にはまだ無理な面があると言える。同様の調査を継続することにより、精緻な類型化を試みてもらいたい。

このような課題が残されていることを意識し、関連する研究分野における最新の研究成果を踏まえつつ、マレーシアを中心として途上国における女子・女性の教育機会の拡大・拡充という問題への取り組みを続け、その成果を教育開発に活かしていくことを期待している。その期待には十分に答えてくれることを確信している。

以上により、審査員一同、総合的に判断して、本論文が「博士（教育学）」を授与するに値するものであるとの結論に達したので、ここに報告する。

以 上